

琉球大学学術リポジトリ

沖縄県における養蚕の起源について

メタデータ	言語: 出版者: 沖縄農業研究会 公開日: 2009-01-29 キーワード (Ja): 養蚕, 歴史, 琉球, 品種, 石垣島, 琉球多蚕繭, 久米島 キーワード (En): 作成者: 四方, 正義 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002015398

沖縄県における養蚕の起源について

四方正義

(京都短期大学)

1. はじめに

藤ノ木古墳から出土した絹織物が復元²⁷⁾されるにさいし、その素材生糸の生産を先にも報告²¹⁾したように石垣島の農家が引き受けた。しかし一方、歴史的な素材生産を養蚕の伝統もない離島でとの疑問もなげ掛けられた。勿論、かかる提言は先の報告²¹⁾にもふれたように素材生産の目的からすると問題ではない。しかし、沖縄県における蚕糸生産の発展を考えるためには歴史を無視することはできない。そこでこれを機会に蚕研究者の立場から、まず伝統の基礎になる養蚕の起源について考察を試みることにした。

ところで、沖縄県における養蚕関係の古い記録として、幸い「李朝実録」所収の漂流談記¹⁷⁾記載がみられる。しかし漂流者の記憶に頼る訳で詳細な点は問題があるかもしれない。また久米島には古くから伝わる養蚕伝説¹²⁾があるが、これはなおさら曖昧さを拭うことができないであろう。

そこで現存⁶⁾、または記載^{2, 4)}があって沖縄県に関係すると考えられる蚕品種の生物学的特性をも含めて、それら談記、伝説を総合的に考察した結果、沖縄県における養蚕の起源について、ある程度、信憑性をたかめることが出来たと思うので報告したい。

2. 沖縄県に関係あると考えられる蚕品種による考察

養蚕の起源にふれた蚕書^{7,8,15,28)}はおおいが、沖縄県における養蚕の起源に関する記述はそれら蚕書のなかにみることができない。ところで、農林省が保存するか⁶⁾または記録^{2,4)}にある蚕品種のなかに琉球多蚕繭、栗国蚕、琉球綿蚕(以上3品種の系統、性状等第1表参照)という沖縄県に関係すると思われるものがある。その由来に関する記載はないが、平塚⁴⁾は琉球多蚕繭を「琉球の多蚕繭」とし、琉球綿蚕も「琉球産生の日本(?)」として、沖縄県との関係を認める記載を

第1表 沖縄県の地名のついた蚕品種の性状

蚕品種	性状	性状						備考
		斑紋	化性	繭色	繭形	ちぢら	特徴	
琉球多蚕繭*	日本種	姫	一化	淡金黄	紡錘	粗	多蚕繭	農蚕試保存
栗国蚕*	日本種	姫		金黄	紡錘	粗綿状		農蚕試保存
琉球綿蚕**	日本?		一化	緑黄	紡錘	綿状	繭大型	現存不明

*農林蚕試⁶⁾、CHIKUSHI²⁾から抜粋 **平塚⁴⁾から抜粋 蚕品種は一応日本種とされているが、形状「斑紋; 姫、繭色; 金黄、緑黄、繭形; 紡錘」は中国種の特徴を示す

している。しかし由来の明らかでない蚕品種もとに、いろいろと考察することは軽率の誇りを免れ得ないかも知れない。しかしここでは、地名のついた蚕品種がその土地と無関係ではないとするのが一般的ではないかと考えて考察をすすめることにした。

仲原¹²⁾は琉球多蚕繭と形状が誠によく似た蚕が、明治末年まで「シمامシ」の名で久米島で飼われていたとしている。勿論、似たものが飼われていたことで、ただちにこれが本土に移されたらしい琉球多蚕繭であるとするにはできないが、可能性はあると思う。第1表の繭性状からみて、3品種とも普通の繰糸は困難で主として真綿用である。「齋民要術」¹³⁾にはこれらの性状をもった蚕品種の存在の記録があり、「蚕飼養法記」¹⁴⁾には「土まゆとてかたち大きに一ふとくながく其内にはむし2〜5つもあり綿にしてひろげやすし」の記載があり、多分古代の多蚕繭種の系統のものと推定される。かかる古くから存在する蚕品種が、明治末まで久米島に存在したことは注目に値する。環境条件で休眠が変化する2化性は別として多化性と1化性は環境条件で化性の変化が容易でないことは多くの研究によって明かである。ところで琉球多蚕繭、琉球綿蚕はともに1化性とされていることからすると沖縄県在来種とは考えにくく、古くからかかる蚕品種が中国にあったこと、あとでも述べる久米島に養蚕伝来の可能性等から考え、中国のどこからか移入され、本土に移ったものと解したい。この3品種は日本種(琉球綿蚕は日本?と記載)とされているが性状は中国種の特徴を強く示していることから、早い段階の移入と考えたい。勿論、3品種以外にも沖縄県に移入されたものがあつたかも知れないが、この3品種などは沖縄県の環境に適応し、さらに、繭から直接、または真綿にして紡糸し織物にするために必要であつたのであろう。いずれにしても、多蚕繭種に関する限り本土より古い移入の歴史が

あつたとみたい。

石渡⁹⁾は「続日本書記」にある条文等から、九州の1部では中古時代において多化性種が飼育され、その蚕は南洋から渡来したものであろうとし、大沢¹⁹⁾も一応、石渡の渡来に賛成しているが中国中部からであろうとしている。平塚⁴⁾は渡来したものが明かでないとしながら、さらに多蚕繭種との関係も明らかでないとしている。渡辺²⁹⁾はわが国の気象や化性上の特性から推して、恐らく南中国系統のものであろうとし、さらに布目¹⁵⁾は「旧唐書」等にもとずき奈良時代の多化性種は江南方面からの渡来であろうと考え、遣唐使による越冬中の帰路であろうともしている。しかし、多化性種は本来非休眠で低温による抑制は別として自然状態において越冬しないものであるはずで、布目¹⁵⁾もここでいう多化性種とは渡辺²⁹⁾の説による四化性種ではなかったかと思われるとしている。いずれにしても、本来の多化性種であるなら、九州の一部とは年間桑のある沖縄と同じ南西諸島にぞくする島であらう。華南の広東地方では古くから大造、輪月が飼育され、10年ほど前までは多化性種の南農7号(115南×九白海)が殆どを占めていた^{3,20)}ほどで、多化性種でなければ飼育が容易でないようである。さらに沖縄の島々は九州南部の島も含めて古くから海上の道として、大陸との交流の要衝であつたことは、考古学上、鑑真和上一行の航海コース¹¹⁾、琉球王国交易ルート²⁴⁾さらにはあとでふれる「李朝実録」に漂流談記¹⁷⁾が作成されるほどの多くの漂流船¹⁾があつたことからもうかがわれる。さらに稲は南から北へ移っていったとする考え³⁰⁾すらあるほどで、多化性種の特性から見て華南の蚕が沖縄や九州南部の島に渡来して適応し、さらに本土に移つたとする考えが妥当であらう。中国南部から直接本土に渡るには昔の船では期間がかかり、非休眠である多化性種の移動には問題がある。移動には卵の抑制が出来る冬が妥当である

が、南西諸島以外では桑がないから難しく、また当時1カ月近くかかる航海では暖かい時期の移動は困難であろう。これらのことから、奈良時代に多化性種が九州の一部で飼育されたという「続日本紀」の記録は沖縄を含めて考えるべきである。

以上、多蚕繭種の一部のは時期、地域は分からないが中国大陸から直接移入されて存在し、本土に移ったこと、多化性種は古代において中国南部から九州南部の島と同じように、むしろ中国南部に地理的に近く、気象条件も更に恵まれた同じ南西諸島である沖縄県の島々にも移入された可能性が考えられる。吉武³¹⁾は酵素を対象として、比較生化学的観点から日本種の成立には中国種2化性あるいはインド種多化性が関連が深いという点から蚕の伝来を南中国経由説が妥当としている。この説も多蚕繭種と多化性種が中国から沖縄にもたらされたとする可能性をつよめる資料の一つであろう。

3. 「李朝実録」の養蚕関係談記を中心とした考察

「李朝実録」¹⁷⁾は史的価値が大きいとされており、このなかの養蚕関係の談記をもとに考察してみたい。端宗大王実録巻第6の沖縄の島々に滞留3年の漂流談記(1450年頃の観察)に「人戸十分内一分養蚕、然亦不実、」とある。その十分の一をどうみるか難しいところである。人口がどの程度の、どのような場所での観察か分からないが、十分の一とする表現は、養蚕が単に試みではなく、生業としてなされていたことを意味するのではないだろうか。養蚕は織物以外に目的がないはずであり、しかも、当時は分業でなく飼育によって得た繭から直接、または真綿にして紡ぐか、あるいは繰糸によって糸がつくられていたものであろう。さらに「然亦不実」は、あとでもふれるようにシママシの紬糸で庶民用の実用的織物がつくられ王様用の高級と思われた織物がつくられて

いなかったのではなかろうか。また、世祖恵荘大王実録巻第27の漂流者は「無桑麻木綿」とし、嘉手納¹⁰⁾は「桑の木以外の養蚕であろうか?」としている。しかし沖縄では天蚕、さく蚕等の野蚕の存在は考えられないし、別に「以桑木為弓」ともあるから、これは場所によって違いがあったものか、十分な観察がなされなかったものと考えたい。桑属は概して温暖の地方に適する植物で⁵⁾しかも現在、沖縄の島々に分布する特色あるシマグワ²²⁾が適応自生するまでには相当の年代が経過している訳で、この頃には当然、島々に存在していたはずである。一方、宣慰使が琉球国正使普須古・副使蔡景に琉球国俗を問うて啓上したものに「問蚕績之事、答曰、促勤蚕績、織錦、不織段子」とある。答えた蔡景は帰化人であるらしいから^{10, 25)}、錦の話は那覇における移住中国人の居留区である唐営=久米村²⁴⁾の実状であって、一般には先の「不実」ではなかったものか。また、なぜ帰化人のかかる技術が一般にそのまま伝わらなかったか。もし前にふれた沖縄に適応して存在した琉球多蚕繭、琉球綿蚕のような糸であったなら錦、段子を織ることが難しいかもしれない。しかしこれらの蚕品種以外にも導入される機会があったであろうから、奨励されれば技術的な展開もあり得たであろうが、むしろ織れない社会的環境にあったのではなかろうか。それについて田中ら²⁵⁾は大明會典等から「1372年に明国との交渉がはじまってからは、中国紋織類が国王、琉球国使臣におくられ、沖縄内でも織られた気配もみられる」とし、さらに「遺老説伝」のなかには「帰化人と思われるものが花布を織りあげて明国への貢物にした記録がある」としている。しかしつづいて「その帰化人の夫と考えられる者が花布と思われる龍袍を着て明国にいたり官に没収され」、さらに「明はひそかに違禁の衣服をつくることをゆるさず」とあるとしている。そのため本土のように帰化人を厚遇して蚕織の業奨励することがな

かったために沖縄では高級織物といわれるものが出来なかったものであろう。さらに明国より賜る「皮弁冠服」の礼服が琉球国の封建体制に組み込まれ権威の象徴とされることによって、ますます一般に使用出来ないためにおのずと育成されなかったであろう。しかし「不実」ではあるが養蚕がなされていた訳で、その糸は一般庶民用の実用的織物に使用されていたのではないだろうか。沖縄では琉球先史時代晩期遺跡から布目疋痕のある土器片*が出土²⁶⁾、また田中ら²⁵⁾は古くより苧麻類等を利用する織物技術があったと想像しているほどであるから、繭から得られた糸を使用して織物が創られていたとしても不思議ではなからう。しかも、植物から繊維をとっている人々にすれば、繭か、または真綿から紬糸をつくることは極めて容易ではなかったであろうか。現存する琉球多蚕繭・琉球綿蚕は繅糸は困難であるが、紬糸をつくるには適した繭である。なお、鹿児島県大島郡染色指導所刊行「本場大島紬について」に「諸文献ニ依レバ印度ニ熱砂地方ヨリ支那台湾ヲ経テ1520年頃琉球久米島ニ伝ワリ同地方ニ於テ久米島紬トシテ盛ンニナリ、之ヨリ大島ヘ伝ワリ脱化シ来レルモノ、如シ」と記載されている³²⁾ようである。この諸文献については分からないが、興味あるので調査中である。

以上、史料的价值のある「李朝実録」談記から15世紀中期には沖縄に養蚕があったことが明かである。それは王様用の錦のようなものでなく、「不実」との観察がなされたような庶民のための実用的な紬織であったと考えられる。かかる紬織は本土でも江戸時代を通じて実用的な絹物として愛用された記録が多く残っている³²⁾ようである。

4. 久米島の養蚕伝説にもとづく考察

沖縄県編集¹⁸⁾の「沖縄の蚕業」のなかで蚕業

の起源についてふれ、「琉球由来記」等にある堂の大比屋の記録から「本県の養蚕業は久米島に起源を有することを推測し得べし」としている。仲原¹²⁾は久米島における養蚕の起源について「堂の比屋という人が中国から伝えたとか、漂流の中国人から治糸の事を学んだという根拠にとぼしい曖昧な、古くから語り伝えられていたものが「間切旧記」に記載され、それがさらに「琉球国由来記」、「琉球国旧記」へと移って混沌とした定め難い伝説になっている」としている。そして、さらに「何れにせよ15世紀後半の頃、既に久米島の人が唐・大和・南蛮に行き来し、また外部から入ってきたらしい者もいたことを思わせるオモロなどがあるので、何れかの道を辿って蚕が入ってきたとしても、あえて意外のことではない」とも述べている。また、田中ら²⁵⁾は「琉球由来記」にもとずき比屋の実在性はまず確かなものとし、養蚕法の伝習の伝説を大体において信じられるとしている。

いずれにしても、証拠がないので何れとも断定できないが、久米島では「間切旧記」のところに既に伝説になるくらい古くから養蚕があったことは間違いのないであろう。ところで、堂の比屋がいたと推定される15世紀前半か²⁵⁾ 終わりごろ¹²⁾に、養蚕技術の移入があったとすると、さきの、「李朝実録」談記¹⁷⁾の時期とほぼ一致する訳である。しかし不便な中世において移入された新しい技術で一応まとまった桑も必要とする養蚕が、直ちに十分の一の生業として行うとは考えられないから、さらに古くから蚕を飼い糸をとる営みがおこなわれていたものであろう。ただ実らずの解釈によっては移入されてそれほど経過していないとも考えられるが、十分の一は多いことになるし、また「李朝実録」談記¹⁷⁾の頃はすでに絹織物が移入されているのであるから、それとの対比からの話と

* 実物観察(大屋一弘教授の好意)に基づき布目疋痕の種類を実験的に検討中

解すれば、やはり試験的な試みとは考えられない。吉沢³²⁾によると紬糸製法は「斎民要術」、「天工開物」、「蚕経」などには記述なく、その後、清の末期に出版された「蚕桑輯要」等にはじめて簡単に記されている訳で、わが国の紬糸は独自の改良が行われて発達したものとされていることからしても、久米島における紬織りの起源についてもあらためて独自性を考えて研究すべきである。沖縄では古代絹の保存環境に恵まれなかった¹⁶⁾であろうが、これからの出土物、古代裂等については実証のために関心を持っていただきたいものである。

5. むすび

古くから久米島に伝えられた養蚕起源の伝説¹²⁾も、「李朝実録」談記¹⁷⁾、琉球・粟国の名の付いた蚕^{2, 4, 6)}と、明治末までのシマムシの存在¹²⁾等と関連づけて総合的に考察すると、根拠にとぼしい曖昧なものでないことがうかがわれる。

「歴史の出発が遅れた社会」²⁴⁾であったかも知れない沖縄県における養蚕起源の解明を、お隣の台湾²³⁾と本土の多くの各府県よりもむしろ一歩すすめることができたと思う。その結果、沖縄県のこれからの蚕糸生産に参考になるばかりでなく、今回の歴史的な「藤ノ木古墳・謎の錦」復元の素材生糸を石垣島から提供したことに意義を感じるものである。

謝 辞

文献収拾にご協力いただいた、大屋一弘、本永博美、崎山正人、劉政麟、石垣金星、袁錫麟、志村明、迫田澄子の諸氏に深謝いたします。

引用文献

1) 赤嶺誠紀 1988 大航海時代の琉球 沖縄タイムス 那覇

- 2) CHIKUSHI Haruo 1972 Genes and genetical stocks of the silkworm KŌBUNGAKU P. C. Tokyo
- 3) 中国農業科学院蚕業研究所編 1981 家蚕遺伝育種学、科学出版社 中国
- 4) 平塚英吉 1969 日本蚕品種実用系譜 大日本蚕糸会蚕糸科学研究所 東京
- 5) 堀田禎吉 1950 農学大系作物部門桑編 養賢堂 東京
- 6) 育種部蚕品種保存研究室 1973 蚕品種改良研究室長打合せ資料、農林省蚕糸試験場
- 7) 井上柳梧 1947 日本蚕糸概論 総論編 羽田書店 東京
- 8) 鑄方貞亮 1948 日本古代桑作史 大八洲出版 京都
- 9) 石渡繁胤 1930 日本における上代の蚕業 佐久良会雑誌 27 : 83-88
- 10) 嘉手納宗徳 1987 琉球史の再考察 沖縄あき書房 宜野湾
- 11) 三島 格 1989 南島考古学 第一書房 東京
- 12) 仲原善秀 1982 久米島紬の歩み 久米島紬の歴史と技法 久米島紬組合 1-29
- 13) 西山武一・熊沢行雄共訳 1957 後魏「賈思」撰(532-549)校訂訳註「斎民要術」上、農業総合研究所 東京
- 14) 野本道玄 1701 蚕飼養法記全(青森県養蚕組合聯合会翻刻 1931)
- 15) 布目順郎 1979 養蚕の起源と古代絹 雄山閣 東京
- 16) 1982 経年風化による形態変化 繊維学会編「図説繊維の形態」6(4) 朝倉書店 東京
- 17) 小葉田淳 1942 李朝実録中世琉球史料(陳哲雄翻刻) 南島第二輯 南島発行所 1-40
- 18) 沖縄県内務部編 1932 沖縄之蚕業 行政

- 史11巻 658-697
- 19) 大沢孝三 1960 第二章蚕種 日本学士院編「明治前日本蚕業技術史」学振:21-66
- 20) 折江農業大学編 1982 家蚕良種繁育及育種学 農業出版社 中国
- 21) 四方正義・志村 明 1990 琉球生糸を“藤ノ木古墳・謎の錦”復元に提供して 沖縄農業 25:1-12
- 22) SHIKATA Masayoshi, Masao HOSHINO, Takeshi SHINJO, Toshiharu FURUSAWA, and Leslie S. INDRASITH 1985 Evaluation of growth and yield of tropical mulberry varieties 2 J. Seri. Sci. Jap. 54(5):366-373
- 23) 台湾省蚕業改良場編 1987 台湾蚕業百年大事記 台湾蚕業百週年及蚕業改良遷場十週年記念専刊 108-136
- 24) 高良倉吉 1989 琉球王国史の課題 ひるぎ社 那覇
- 25) 田中俊雄・田中玲子 1976 沖縄織物の研究 紫紅社 京都
- 26) 友寄英一郎・高元政秀 1969 フェンサ城貝塚調査概報 琉大法文学部紀要社会編 13:55-94
- 27) 角山幸洋 1989 織物の復元「藤ノ木古墳とその時代」展 檀考研 132-138
- 28) 上垣守国 1803 扶桑国第一産蚕秘録(粕淵宏昭翻刻・訳 1981) 日本農書全集35 農文協 3-254
- 29) 渡辺勤次 1947 養蚕學 アズミ書房 東京
- 30) 柳田国男 1978 海上の道 定本柳田国男集第1巻(29-34) 筑摩書房 東京
- 31) 吉武成美 1968 家蚕日本種の起源に関する一考察 日蚕雑37(2):83-87
- 32) 吉沢弥吾 1960 第5章製糸 日本学士院編「明治前日本蚕業技術史」231-302